

GINGA REPORT 401

No. 94
2023.3

そらんぼ四日市 検索

発行日：令和5年3月1日
編集&発行：四日市市立博物館・プラネタリウム
電話：059-355-2700

3月の星空

星図：ステラナビゲータ11/(株)アストローツ

挟まれたかに座

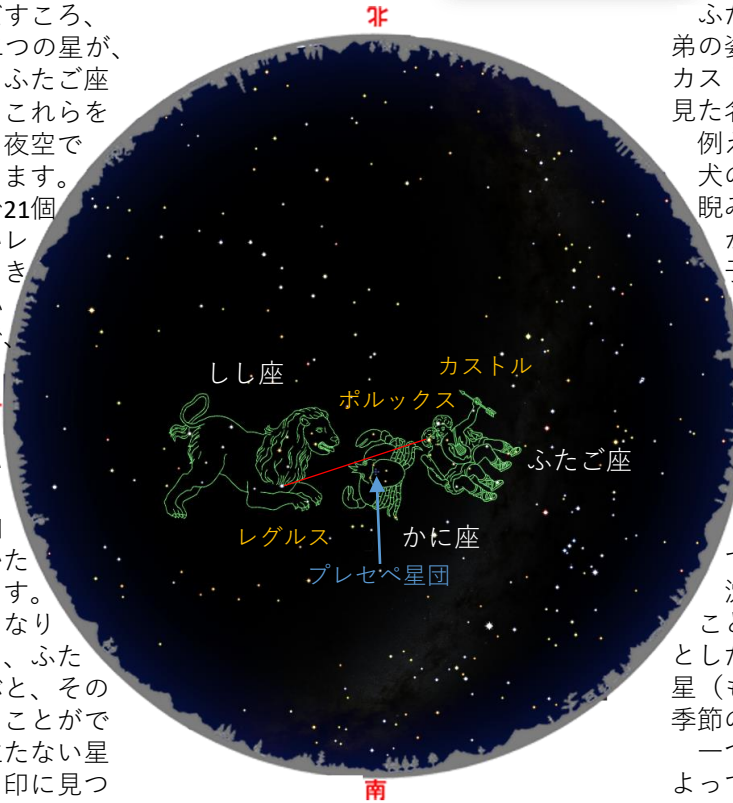
3月15日21時の星図

日本の呼び名

冬の星座が西の空に傾きだすころ、頭の真上近くに輝く明るい二つの星が、カストルとポルックスです。ふたご座の兄弟の名前がついた星で、これらを頭とすると、その西側に冬の夜空で肩を組む双子の姿が想像できます。

またこのころには、全天で21個ある一等星のうち、最も暗いレグルスもみえるようになってきます。レグルスはしし座の心臓のところで輝いているので、ししの心臓とも呼ばれています。

そんなしし座とふたご座に挟まれるようにして輝いているのが、かに座です。5等に近い微光星がつくる小さな四辺形と、その中に淡い光のかたまり、プレセペ星団があります。観測するには双眼鏡が必要になりますが、しし座のレグルスと、ふたご座のポルックスを線で結ぶと、その真ん中あたりに見当をつけることができます。かに座はあまり目立たない星座ですが、明るい一等星を目印に見つけてみてください。



ふたご座はギリシャ神話の仲よし兄弟の姿を表した星座ですが、日本でもカストルとポルックスを、一対の星と見た名前がたくさん伝えられています。

例えば、広く分布しているものに、犬の目、猫の目、蟹の目、眼鏡星、睨み星など、カストルとポルックスが西へ沈むとき、左右にならぶ様子を二つの目とした呼び名があります。同様の見方でも、門の柱に見立て、門星（もんぼし）、門柱星（もんばしらぼし）など、地域が変わるとモチーフも変わってきます。

年中行事に関連した呼び名では、ひな人形に見立てたひなまつり星が、今の季節にぴったりです。他にも、二つの星が山際に沈む旧正月のころ、寒さが和らぐことを祈って餅を食べたことを由来とした、雑煮星（ぞうにぼし）や餅食星（もちくいぼし）など、目印とする季節の異なる名前もあります。

一つの星の和名だけでも、地域によって様々なものがあり、日本の多様な星の見方を楽しめます。

今月の天文トピック

©NASA/joel kowsky

日本人宇宙飛行士 若田さんの帰還に向けて

地上から約400km上空を飛行する国際宇宙ステーション(ISS)は、微小重力、宇宙放射線、豊富な太陽エネルギーなど、地上とは全く異なる特殊な環境です。ISSには「きぼう」と呼ばれる日本の実験棟があり、宇宙環境を活かした様々な実験が行われてきました。

その中でも水棲生物実験装置を用いて、メダカの幼魚を2か月間長期観察し、宇宙環境における骨代謝のメカニズムを研究する実験では、宇宙と地上とでは発現が大きく異なる遺伝子が複数発見されました。今後これらの遺伝子発現がどのようにして発生するのかの研究が進展すれば、宇宙飛行士などの長期宇宙滞在における健康維持の技術・知見が得られるものと期待できます。

そんなISSに現在日本人宇宙飛行士、若田光一さんが滞在されています。4月には約半年間という長期の滞在期間を終え、帰還予定です。新たな実験報告など、様々な話が聞けるのではないのでしょうか。



博物館主催 スターウォッチング

博物館主催きらら号観望会

場所：博物館前市民公園

◇3月25日(土) 19:30~21:00

「冬の星雲・星団を見よう」

◇3月26日(日) 11:00~13:00

「太陽を見よう」



編集後記

3月は冬の星座と春の星座の入れ替えの季節です。冬の夜空の主役、オリオン座からしし座にバトンタッチしていきます。

冬の夜は長くて寒いと思っていましたが、3月半ばになると夜の長さが次第に短くなっていき、知らない間に春はもうすぐそこまで来ているのを感じます。冬の星座を今のうちにしっかりと目に焼き付けておきたいものです。

3月の月

7日  満月

15日  下弦

22日  新月

29日  上弦

※当日受付・参加無料です。
※天候不良時は中止です。(通常3時間前に決定します)
※マスク着用、手指消毒、観望会受付票の記入をお願いいたします。